

5月の連休に奈良県の明日香村を訪ねた。「水落遺跡」という日本最初の水時計の施設跡を見る機会があり、興味深かった。日本書記によれば、大化の改新で有名な中大兄皇子が作らせたものだという。遺跡展示の説明には、中国文明へのキャッチアップを目指した7世紀、国家によ

会の生産性が高まり、律令国家の基盤が整ったとも考えられる。

時代は下って現代の日本。長期的な経済運営の要として、生産性の引き上げ、特に日本が後れを取っているサービス産業の生産性向上に焦点が当たっている。とりわけ政府サイドから、生産性向上の必要性が指摘

れているかどうかは定かではない。たとえばある地方銀行で「どうして生産性を上げる必要があるのかわからない。生産性が向上しても業務量は変わらないはず。労働時間を減らすことはむしろ手を抜くことにもつながりかねない」といった反応を受けたことがある。流通業では

働からやり方を革新して生産量を飛躍的に増加させるという着想は生まれない。米国で生産性向上の牽引力となってきたIT投資の日本での遅れや、ITの使い方のまずさは、すでに実証分析でも指摘されているが、それも不思議ではない気がする。生産性の向上は大変に重要な目標だが、有限な資源で最大限の効果を上げるのが経営の知恵の見せどころである。これは営利企業の本質そのものであるが、なぜ今になって政府が音頭をとらなければならぬのかという根本問題に行き当たる。

飛鳥時代の水時計が問いかけるもの

る先進技術の大胆な吸収事例として紹介されていた。

すなわち、それ以前には人々は「共通の時間」を正確には知らなかったということだ。仕事でも社会生活でも不便や非効率が大きかっただろう。時間が可視化されることで社

されている。少子高齢化の日本にとって経済成長は贅沢品ではなく必需品である。少ない人手で多くの価値を創造していくことの必要性はマクロ経済的に見ると明白だ。

しかし、「マクロ的必要性」がミクロ的・現場的必要性として感じら

「長時間働いているのに何か問題なのか」という質問もあった。

現場で意味が見いだせないままに生産性向上と叫んでみても現実とは動かない。現場を責めるもの外れで、どこかでボタンの掛け違いがある。「業務量は変わらない」という反応は、新規参入や新しいサービスが登場してきても、それが自分たちの業務にかかわってくるということ現場では感じていないことを意味する。また、「労働時間を減らすのは手抜き」という考え方は、サービスの「質」のためには投入する労働コストは無限でも構わないという発想の裏返しである。

働からやり方を革新して生産量を飛躍的に増加させるという着想は生まれない。米国で生産性向上の牽引力となってきたIT投資の日本での遅れや、ITの使い方のまずさは、すでに実証分析でも指摘されているが、それも不思議ではない気がする。生産性の向上は大変に重要な目標だが、有限な資源で最大限の効果を上げるのが経営の知恵の見せどころである。これは営利企業の本質そのものであるが、なぜ今になって政府が音頭をとらなければならぬのかという根本問題に行き当たる。

経済を見る眼

今週の眼

早稲田大学大学院ファイナンス研究科教授
川本裕子



かわもと・ゆうこ ●東京大学卒、英オックスフォード大学経済学修士。大阪証券取引所・マネックスピーンズHD社外取締役。ミレアホールディングス社外監査役。経済財政諮問会議・成長力加速プログラム・タスクフォースメンバー。

そこからは同じひとりの人間の労働からやり方を革新して生産量を飛躍的に増加させるという着想は生まれない。米国で生産性向上の牽引力となってきたIT投資の日本での遅れや、ITの使い方のまずさは、すでに実証分析でも指摘されているが、それも不思議ではない気がする。生産性の向上は大変に重要な目標だが、有限な資源で最大限の効果を上げるのが経営の知恵の見せどころである。これは営利企業の本質そのものであるが、なぜ今になって政府が音頭をとらなければならぬのかという根本問題に行き当たる。

企業は生産性向上を基軸にする。政府は競争促進、規制改革、海外からの投資やM&Aの環境を整える。混沌とした社会に規律を与えるために「共通の時間」を導入した7世紀と同様、官と民のトップは、本来の役割は何かを考えるべきだろう。 函